英語の学力について

上垣宗明*

A Research of the Students' English Ability

Muneaki UEGAKI*

ABSTRACT

This paper focuses on the relation with students' English ability, their grammatical ability, their English vocabulary ability, and their motivation for English and its learning. To survey their motivation, the exact same questioannaires were conducted twice in July 2015 to first graders and in July 2016 to second graders. Concerning their English ability, I referred to the four term exams, midterm and end of term exams of the first semester, 2015 and midterm and end of term exams of the first semester, 2016. To evaluate their grammatical ability, I made an original test consinsting of 31 questions in 2015. I utilized the same 25 questions that I extracted from 2015 year test and added 50 new questions to them, 75 questions in total. Concerning their English vocabulary ability, I made two kinds of test. One was a test that I made students translate Japanese into English, English to Japanese, and transcribe in English, based on the text book. The other test consinsting of 120 questions was made, based on SVL 12,000. It was in a multiple choice format. The findings are that the average score of 4 midterm and final exams are related to every other ability. Especially, that score had strong relation with the vocabulary and grammatical ability. Another finding was that the ability of discribing English words had strong relation with the average score of the 4 tests.

Keywords : English ability, English grammatical ability, English vocabulary ability, term exams

1. はじめに

平成 23 年度に，新小学校指導要領(1)が施行され，小学校 5・6 年生で，英語の授業が必修化された．それ以前は，必修ではなかったが，学校の裁量で英語を教育課程に組み入れていた小学校もあった．今回の調査対象となる学生は，6 年次に新学習指導要領に移行しており，5 年までは旧学習指導要領に基づいて授業が行われていた．新指導要領への移行期間中の学生に関する調査ができるのは，現高校 2 年生の学年だけである．この学年の学生を調査することは，今後，新学習指導要領に基づき，小学校で英語授業を受けた学生，受けていない学生，移行期間中の学生の調査を行う際に，比較対照として貴重な資料になるといえる．

今回の調査は，平成 28 年度に神戸市立工業高等専門学校（以降，神戸高専）の 2 年に進級した 3 クラス合計 121 名を対象とする．高専は 5 年制で他の校種と比較すると修業年限が長く，神戸高専では英語に関する授業は 1 年生から 5 年生まで継続して実施されている．平成 27 年度は，英語力と学習動機や文法力に関しての調査を行った．英語力は学習動機よりも文法力との相関が強いことがわかった(2)．平成 28 年度は，前年の調査に加え，英語単語力についても調査し，さらに広い視点から学生の英語力についての調査を行う．

英語学習動機については，平成 27 年度と同じ質問紙を用いて調査を行った．同じ質問紙を用いることで，どのような変化が生じているのかを把握することができ，学習動機を把握することは，学生のニーズにあった英語教育を実践していくうえで，必要なことである．

今回調査対象とした英語文法力，英語単語力，学習動機は，英語学習において，非常に重要な要素である．単語について瀬川は，基礎的・実践的なコミュニケーション能力をつけるためにも，もっとも基礎・基本となる重要な学習である(3)，と，その重要性について述べている．文法事項についても，文部科学省の高等学校学習指導要領では，コミュニケーションを支えるものであることを踏まえ，言語活動と効果的に関連付けて指導すること，となっており，英語学習の基礎を支えるものとして位置づけられている(4)．

＊　一般科　教授

2. 調査について

分析対象とする資料は，試験（1 年次の 4 回と 2 年次の前期中間・定期の合計 6 回）の結果，文法テスト（平成 27・28 年度に実施した 2 回のテスト），質問紙（平成 27・28 年度に実施し，2 回とも同じ質問紙を使用），単語テスト（平成 28 年度に実施した 2 種類）である．本調査は，「エクセル統計 2015（SSRI：社会情報サービス株式会社）」を使用し分析した．

2.1 試験について

現在では，英語力を測定するテストとして TOEIC テストが企業や教育機関などで一般的に用いられている．以前の著者の調査[5]で，学校の試験と TOEIC や TOEIC Bridge のスコアとの相関が高いことがわかった．本稿では，TOEIC スコアと相関が高い試験の点数を学生の英語力を判断する資料とする．全ての試験の実施日を下記に示す．

1 年次

前期中間試験　平成 27 年　6 月 15 日（月）1 時間目
前期定期試験　平成 27 年　9 月 17 日（木）1 時間目
後期中間試験　平成 27 年 11 月 30 日（月）1 時間目
後期定期試験　平成 28 年　2 月 17 日（水）1 時間目

2 年次

前期中間試験　平成 28 年　6 月 15 日（水）1 時間目
前期定期試験　平成 28 年　9 月 26 日（水）1 時間目

全ての試験や質問紙などに回答した 109 名の学生の全試験の結果を表 1 に示す．以降，調査対象とする学生は，109 名（クラス A 39 名，クラス B 33 名，クラス C 37 名）で，以降，この 109 名の学生の結果のみを抽出し，分析と考察を加える．

表 1　全ての試験の結果

		n	m.s.	S.D.	max	min
1年	前期中間	109	76.24	12.66	95	46
	前期定期	109	77.23	11.73	97	43
	後期中間	109	67.64	16.25	97	25
	後期定期	109	78.08	11.02	98	47
2年	前期中間	109	72.68	13.89	97	39
	前期定期	109	72.38	14.9	97	27
平均		109	74.04	11.62	93.9	44.1

n：サンプル　m.s.：平均点　S.D.：標準偏差
max：最高点　min：最低点

平均点においては 67.64 から 78.08 とほぼ 10 点近い差が見られ，標準偏差においても 11.02 から 16.25 と 5.2 の差がみられる．特に，1 年後期中間試験は他の試験に比べて平均点が低く，標準偏差の値が高い．この 6 つの試験に統計的に差があるのかを，クラスカル=ウォリス検定で分析した．その結果，1%水準（χ^2 値：34.38，自由度：5，p 値：0.001）で，この 6 つの試験には明らかに有意差があった．次に，どの試験が他の試験と比べて異なっているのかを，また，一番違いが大きいのかを分析できる多重比較（Scheffe 法）を用いて分析した．その結果を表 2 に示す．

表 2　全ての試験の多重比較（Scheffe 法）の結果

	1前中	1前定	1後中	1後定	2前中	2前定
1年前期中間		0.19 0.99	17.0 0.01	0.74 0.99	3.78 0.71	3.30 0.77
1年前期定期			20.83 0.00	0.18 0.99	5.67 0.46	5.08 0.53
1年後期中間	**	**		24.87 0.00	4.76 0.57	5.33 0.50
1年後期定期			**		7.87 0.25	7.17 0.31
2年前期中間						0.02 1.00
2年前期定期						

数値　上段：χ^2 値　下段：p 値
**：1%有意　*：5%有意

表 2 から，1 年後期中間試験が，1 年前期中間試験（χ^2 値：17.0，p：0.01），1 年前期定期試験（χ^2 値：20.83，p 値：0.00），1 年後期定期試験（χ^2：24.87，p 値：0.00）に対して，1%水準の有意差が認められた．6 つの試験で，他の試験との対の比較で有意差があった 1 年後期中間試験を省き，残りの 5 つの試験をクラスカル=ウォリス検定で分析した．その結果，試験全てに対してのクラスカル=ウォリス検定の結果は，1%水準での有意差は認められなかったが，5%水準（χ^2 値：13.25，自由度：4，p 値：0.01）の有意差が認められた．それぞれの試験における多重比較（Scheffe 法）の結果を表 3 に示す．

表 3　5 つの試験の多重比較（Scheffe 法）の結果

	1前中	1前定	1後定	2前中	2前定
1年前期中間		0.19 0.99	0.69 0.95	3.8 0.43	3.13 0.54
1年前期定期			0.16 0.99	5.70 0.22	4.87 0.3
1年後期定期				7.76 0.1	6.79 0.15
2年前期中間					0.03 0.99
2年前期定期					

数値　上段：χ^2 値　下段：p 値

表３から，他の試験との対の比較では有意差はみられなかったが，χ^2 値が高く，p 値が低いのは，1 年後期定期試験と 2 年前期中間試験で，その次は 1 年後期定期試験と 2 年前期定期試験である．その両方の比較で共通する 1 年後期定期試験を省き，1 年前期中間，定期，2 年前期中間，定期，そしてそれらの平均の 5 つを分析対象として，クラスカル=ウォリス検定で再度分析した．その結果，5%水準でも有意差（χ^2 値：9.29，自由度：4，p 値：0.054）はみられなかった．そのため，学生の英語力の指標として，客観性が一番高いと思われるこの 4 つの試験の平均点を，英語力として，分析対象とする．試験の平均の概要は，平均点：74.63，最高点：93.7，最低点：46.7，標準偏差：11.7 であった．

2.2 質問紙について

前年，英語や英語学習に対しての動機づけや意識を調査するために『外国語教育リサーチマニュアル』(6) を参考にした質問紙を作成した(Appendix 1)．前年度と今年度の英語や英語学習に対する動機を比較するために全く同じ質問紙を利用した．質問は 21 項目からなり，4 段階評価（1. 全然そう思わない，2. あまりそう思わない，3. だいたいそう思う，4. まったくそう思う）で回答を求めた．質問紙を配布し，「このアンケートは成績に全く関係ありません．正直に答えてください．」と教示した．実施要領は以下の通りである．

クラス A　7 月 8 日（金）15：55～16：05

クラス B　7 月 8 日（金）　9：15～ 9：25

クラス C　7 月 8 日（金）13：10～13：20

内的一貫性を測定するためのクロンバックα係数という値を用い，質問紙が同じ概念を測定しているのかを検討した．ゾルタイは，「うまく作られた質問紙であれば，たとえ 10 項目程度しかない場合でも，内的一貫性による信頼度係数は 0.8 程度あります．」(7) と述べている．昨年度は，この指摘に沿うように，クロンバックα係数が 0.8 に近づくように，4 項目を逆転項目とし，逆数 5－X（X は素点）で統計処理を行った．この 4 項目を逆数にする前のクロンバックα係数は 0.703 と低い値を示していたが，それらを逆数にして分析すると，クロンバックα係数は 0.82 となり，英語や英語学習への動機づけを測定する信頼度係数は充分に確保されていた．

本調査も前年度と同様に分析した．まず，全ての値のクロンバックα係数を求めた．その結果，0.78 と昨年度よりも高い値を示したが，0.8 には達していなかった．昨年度と同じ 4 項目を逆数として分析した結果，昨年と同じ値（0.82）を示した．

昨年度と今年度の結果を t 検定で分析した．その結果，有意差は見られなかった（1 年　平均値：57.75　標準偏差：8.4，2 年　平均値：56.93 標準偏差：8.13，t：1.21，自由度：108，p：0.23）．

2.3.1 単語テスト 1 について

単語テスト 1 は，WORLD TREK English Communication II (8) のレッスン 3 とレッスン 4 から出題した．各レッスンのテストは 3 つのパートからなりそれぞれ 50 点満点である．各テストは各レッスン終了後に実施した．パート 1 は，ディクテーション形式で，教科書の内容を要約した英文を聞き，(　)内に聞こえた単語を記述する問題で，14 問を出題した．パート 2 は，基本的には教科書の範囲内の新出単語を英語から日本語に訳す問題で 18 問，パート 3 は日本語を英語に訳す問題で 18 問を出題した．それぞれのテスト結果の概要は，レッスン 3 は平均 34.2 点，最高 48 点，最低 13 点，標準偏差 7.59，レッスン 4 は平均 34.5 点，最高 49 点，最低 13 点，標準偏差 7.74 であった．両テストの合計は，平均 68.7 点，最高 97 点，最低 26 点，標準偏差 14.15 であった．

2.3.2 単語テスト 2 について

今回単語テスト 2 として，羽鳥他(9) で語彙リストを検証する際に用いられた 4 つのリストの内の 1 つである SVL 12,000 から著者が任意で 120 語を抽出し，出題した．SVL 12,000 とは，アルク社が作成し，英語話者の使用頻度を基準にしつつ，日本の英語学習者にとっての「有用性」と「重要性」に配慮して選定された重要英単語リストである．リストはレベルが 12 段階に分けられており，基礎から上級へと 12 のレベルに区分されている．今回の単語テストでは学生のレベルを考慮し，下から 2 番目のレベル 2 から出題し，1 問 1 点で採点した．出題形式は，英単語の意味を 4 つの選択肢から正解を選ぶ形式である．テスト配布時には，成績とはまったく関係がないことと，自分の単語力を知るためのテストであることを学生に周知した．

（出題例）

ceiling　　A.屋根　B.天井　C.玄関　D.戸口

実施要領は以下の通りである．

クラス A　10 月 11 日（月）11：45 ～12：15

クラス B　10 月 12 日（水）　9：15 ～ 9：45

クラス C　10 月　7 日（金）　9：15 ～ 9：45

結果の概要は，平均 74.1 点，最高 104 点，最低 49 点，標準偏差 10.48 であった．

2.4 文法テストについて

前年は，中学時代に学習したであろう文法事項についてのテストを 7 月の中旬に実施した．前回のテストは 31 問であったが，今回のテストは，前回の 31 問の中からまったく同じ 25 問を出題し，さらに，前年度中に学習した文法事項に関する問題を 50 問追加し，合計 75 問のテストを実施した(Appendix 2)．テスト配布時に，成績とは全く関係がなく，自分の文法力を知るためのテストであることを周知した．

テスト結果の概要を表 4 に示す．表中の表記は，“1

年”は平成 27 年 7 月中旬に実施した文法テストの 31 問中 25 問の結果，“2 年（1 年）”は今年度実施したテストのうち 1 年次に実施したテストと同じ問題だけを抽出した結果を示す．“2 年”は 1 年次に学習した文法事項 50 問の結果である．

表４　文法テストの結果

	m.s.	S.D.	max	min
1 年	17.51	3.44	24	7
2 年（1 年）	16.03	3.68	26	8
2 年	18.5	6.59	37	4

n : サンプル　m.s. : 平均値　S.D. : 標準偏差
max : 最高点　min : 最低点

この 3 つのテストをクラスカル＝ウォリス検定で分析した結果，1%水準の有意差がみられた（χ^2 値 : 12.78，自由度 : 2，p : 0.0017）．次に，多重比較（Scheffe 法）で分析すると“1 年”と“2 年”では，有意差が見られなかった（χ^2 値 : 0.39，p : 0.82）．しかし，“1 年”と“2 年（1 年）”では，5%水準の有意差がみられた（χ^2 値 : 7.47，p : 0.02）．そして，“2 年（1 年）”と“2 年”では，1%水準の有意差が認められた（χ^2 値 : 11.3，p : 0.004）．その結果を表５に示す．

“1 年”は，中学時代に学習した文法事項を 1 年次にテストした結果であり，全く同じ問題を 2 年次にテストした“2 年（1 年）”とで 1%水準で有意差が認められた．両テストでは，平均点と標準偏差ではあまり差（平均点 : 1.48，標準偏差 : 0.24）はみられず，統計的に分析をしなければ，有意差が認められないような結果であった．

表５　各テストの多重比較の結果

	χ^2 値	p 値	判定
1 年 : 2 年	0.39	0.820	
1 年 : 2 年（1 年）	7.47	0.024	*
2 年（1 年）: 2 年	11.3	0.003	**

** : 1%有意　* : 5%有意

3. 考察

それぞれの調査項目の相関を求め，英語力にどのような要素が強く影響しているのかを検討する．

相関を求めるものは，① : 4 つの試験の平均点，英語や英語学習に関する動機づけについての② : 1 年次と③ : 2 年次の質問紙の結果，単語テスト 1 のレッスン 3 と 4 の④ : ディクテーションの合計，⑤ : 英語から日本語の合計，⑥ : 日本語から英語の合計，そして，⑦ : 全ての合計点，⑧ : 単語テスト 2，文法については，⑨ : 中学校時代に学習した文法事項を 1 年次に受けたテストの結果，⑩ : ⑨と同じ問題を 2 年次に受けた結果，⑪ : 1 年次に学習した文法事項の問題の結果，⑫ : 2 年次に受けた文法問題の全ての合計，この 12 項目についてスピアマンの順位相関行列を用い分析した．

その結果を表６に示す．

右上部の数値が相関係数を表し，左下部は，判定結果を示している．

次に，各項目について詳しく検討していく．

①4 つの中間・定期試験の平均点については，全ての項目と相関関係があることがわかる．１番高い相関係

表6　全ての項目の相関について

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫
①		0.21	0.23	0.59	0.61	0.52	0.63	0.36	0.39	0.32	0.53	0.53
②	*		0.61	0.14	0.19	0.20	0.20	0.06	0.04	0.14	0.17	0.20
③	*	**		0.28	0.24	0.25	0.29	0.17	0.12	0.08	0.22	0.20
④	**		**		0.66	0.66	0.84	0.64	0.47	0.32	0.41	0.42
⑤	**		*	**		0.79	0.92	0.55	0.29	0.16	0.43	0.37
⑥	**	*	**	**	**		0.91	0.55	0.24	0.19	0.38	0.34
⑦	**	*	**	**	**	**		0.64	0.36	0.24	0.45	0.42
⑧	**			**	**	**	**		0.35	0.21	0.33	0.30
⑨	**			**	**	*	**	**		0.46	0.32	0.42
⑩	**			**			*	*	**		0.58	0.81
⑪	**		*	**	**	**	**	**	**	**		0.94
⑫	**	*	*	**	**	**	**	**	**	**	**	

** : 1%有意　* : 5%有意

数を示しているのは，⑦単語テスト 1（0.63）の合計点であった．単語テスト 1 の各項目④⑤⑥については，全てに対して，相関係数が高く，試験で高い点数を取れる学生は，教科書の単語をしっかりと覚えているといえる．しかし，教科書からの出題ではなく，SLV12,000 からの出題である⑧単語テスト 2 に対しては，係数が 0.36 なので 1%水準で相関があるものの，教科書からの出題の単語テスト 1 よりもかなり低い値を示しているため，強い相関とはいい難い．文法に関しては，⑨⑩の中学校時代の学習内容の問題よりも（⑨：0.39，⑩：0.32），⑪1 年次に学習した文法内容の問題の方が相関係数は高い（0.53）．英語や英語学習に対しての動機に関しては，5%水準で相関は認められるものの強いとはいい難い結果であった．昨年度の質問紙の結果②との相関係数は，0.21 と試験に対する全ての項目のなかで一番相関が弱かった．2 年次に調査した結果③でも，0.23 と 1 年次よりも相関係数は 0.02 高いが，テストの点数と学習動機との相関は，単語力，文法力よりも弱いことがわかった．

次に，学習動機について検討する．先述したように，学習動機と英語力の相関は認められるものの強いとはいえない結果であった．学習動機と相関が高いものは，1 年次の結果②よりも，2 年次の結果③のほうが，相関がある項目が多い．③の結果から，単語 1 の 4 項目④⑤⑥⑦に対しては，相関係数は非常に高いとはいえないが，0.24～0.29 と相関が認められる数値である．一番高い値は，⑦の単語テスト 1 の合計点である．学習動機が高ければ単語をしっかり覚えることができているといえる．逆に，相関が認められなかったものは，⑧⑨⑩で，単語テスト 2 と中学生時代に学習した文法事項であった．しかし，1 年次に学習した文法事項⑪については，強いとはいえないが，5%水準の相関（0.22）が認められた．

単語テスト 1 の結果について考察する．④ディクテーションは，②1 年次の学習動機以外の項目に対して，1%水準の相関が認められる．ディクテーションも単語テスト 1 の一部として実施したので，⑤日本語から英語，⑥英語から日本語，⑦単語テスト 1 の合計点とは相関が強かった．それに加え，①試験との相関も 0.59 と高い値を示していた．⑤⑥は，日本語から英語，英語から日本語のような問題は暗記をすればよい点数を取ることができる問題である．しかし，ディクテーションは音を聞いて正しく記述する必要がある以上に，どうしても音が弱くなる過去形や複数形，三人称単数現在のときの動詞につくーs も文脈を見て判断する必要があるので，一般的な単語テストよりも，試験に近い英語力を必要とすることは十分にこの結果から推測できる．⑧単語テスト 2 に対しても，非常に高い相関（0.64）があり，日本語から英語，英語から日本語のような一般的な単語テストとは異なる能力が必要なテストである．

⑧単語テスト 2 については，学習動機②③以外との相関が認められた．特に相関が強かったのは，単語テスト 1 の 4 項目（0.55～0.64）に対してであった．また，上記の項目以外でも試験の平均点①と文法テスト⑨⑪⑫との相関も 1%水準の相関が認められた．⑩に関しては，5%水準ではあるが相関があった．上記の項目とは反対に，相関が非常に低かったものは，1 年次と 2 年次に測定した学習動機であった．特に，1 年次の学習動機②とは，0.06 と非常に低い相関係数を示していた．

文法テスト⑨⑩⑪⑫に関しては，それぞれに異なった項目と相関があった．全ての項目との相関が認められたものは，⑫の 2 年次に受けた文法テストの合計点であった．学習動機とは相関が低いものの 5%水準で相関があり，反対に相関係数が高いものは，⑩2 年次に受けた文法テストの 1 年次と共通の問題と⑪1 年次に学習した文法事項の問題であった．そして，⑨1 年次に受けた文法テスト（0.42）の方が①4 つの試験の平均点よりも相関係数が低かった（0.53）．文法テストの 4 項目の中で，特に他項目との相関が低かったものは，⑩1 年次と同じ内容を 2 年次に受けたものであった．学習動機②③と単語テスト 1 の⑤日本語から英語，⑥英語から日本語の合計 4 項目に対しては相関が確認できなかった．

4. まとめ

前章で，全ての項目に関しての相関係数を求め，その結果について検討を加えた．以降では，特徴的な結果について分析を加える．全ての項目と相関が認められたものは，①試験の平均点，⑦単語テスト 1 の合計点，⑫2 年次に実施した文法テストの合計点の 3 項目であった．それぞれ，5%水準の相関項目が 2 項目あり，共通したものは②1 年次の学習動機であった．この項目は 1 年前に調査したデータを利用したので，現在の学習動機とは異なっているために英語力，文法力，単語力との相関が弱かったのだろう．このことは，②1 年次の学習動機と③2 年次の学習動機との④⑤⑥⑦単語に対する相関が認められる項目の比較からもうかがえる．②は④⑤⑥⑦に対して，2 つの項目で 5%水準の相関が認められるが，③は全ての項目に対して相関が認められ，3 つの項目に対して 1%水準の相関が確認できた．しかし，単語力でも範囲が指定された単語力⑦に関してであって，範囲が指定されていない単語力⑧は，他の単語テストとは異なる相関傾向を示した．⑧は，特に，指定された範囲内の単語力の合計点⑦とそのディクテーション能力④に高い相関を示した．

④ディクテーションの結果は，単語テスト 1 の中に含めたが，相関係数から考察すると単語ではなく，試験の平均①と同じような相関を示した．単語テスト 1 の他の項目とは異なり，②1 年次の学習動機に対して，

相関は認められなかったが，それ以外に対しては，1%水準の相関が確認できた．特に，①試験の平均点との相関係数は，0.59 と高い値を示していた．

5. 今後の課題

前年度は，英語力と関係のあるものの調査を行い，学習動機よりも文法力の方が，英語力に関係していることがわかった．本調査は前年度の調査に加え，単語力についても，同様の調査を行った．その結果，英語力に対しては，文法力と同様に単語力も英語力に影響していることが確認できた．単語力の中でも，ディクテーション能力は，他の項目に対して，英語力に近い相関傾向を示していた．今後，調査項目を再検討し，さらに詳しい調査が必要である．また，学習動機は，変化していくものなので，より詳しく学生の学習動機を把握するためにも継続的な調査が必要である．

中学時代に学習した文法事項の同じテストを 1 年次と 2 年次に実施した．その結果，5%水準の有意差が見られ，1 年次に実施した方が，25 点満点中 1.5 点，平均が良かった．神戸高専で 1 年間，英語を勉強する中で中学時代に学習した文法事項を忘れている学生がいた．高専では，新しい文法事項を中心に学習するので中学時代の文法事項については，解説をしないことがある．しかし，この結果を見ると既習の文法事項でも，学生に注意を向けさせる授業が，今後必要であることを痛感した．また，神戸高専 1 年次に学習した文法事項において，50 点中，平均が 18.5 点と非常に低い値であった．中学時代に習った文法事項と同様に，1 年次で学習した文法事項についても，教科書に出てきたときには，学生に気づかせ，思い出させるような授業を心がける必要がある．

参考文献

(1) MEXT　新学習指導要領 第4章 外国語活動 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/gai.htm

(2) 上垣宗明:「動機づけと英語力について」, 神戸市立工業高等専門学校研究紀要, 第 54 号, pp.27-32, 2016.

(3) 瀬川直美:「英語授業における『COCET2600』を活用した語彙学習の取り組み」, 全国高等専門学校英語教育学会研究論集, 第 34 号, pp.127-136, 2015.

(4) (1)に同じ

(5) 上垣宗明 :「TOEIC スコアと中間・定期試験の点数について」, 神戸高専研究紀要, 第 52 号, pp.97-102, 2014.

(6) ハーバード・W・セリガー, イラーナ・ショハミー著, 土屋武久他訳:「外国語教育リサーチマニュアル」, 大修館書店, 2001.

(7) ゾルタイ・ドルニェイ著, 八島智子, 竹内理訳:「外国語教育学のための質問紙調査入門」, 関西大学出版部, 2006.

(8) 望月正道　他 6 名:「WORLD TREK English Communication II 」, 桐原書店, 2016.

(9) 羽鳥吉明, 大野佳代子:「高専生に必要な語彙を求めて―学習用語彙リストを用いた語彙データベースの構築とその検証―」, 全国高等専門学校英語教育学会研究論集, 第 35 号, pp.87-96, 2016.

Appendix 1　質問紙（抜粋）

次の項目についてあなたの気持ちにあてはまる所を〇で囲んでください。

		全然そう思わない	あまりそう思わない	だいたいそう思う	全くそう思う
1	自分の英語が通じるとうれしい	1			
2	外国人ともっと会話してみたい	2			
3	英語を話せるようになりたい	3			
4	英語は簡単だと思う	4			
5	将来、英語は大切だと思う	5			

Appendix 2　文法テスト（抜粋）

次の英文が正しければ、___ に〇を、間違っていれば×を記入しなさい。また、間違っていれば、間違っている場所を指摘し、最適な語句を書きなさい。

1, That was most exciting soccer game this year.　_____　_____→_____

2, Have you never tried a vegetarian hamburger?　_____　_____→_____

3, Was the letter writing by him?　_____　_____→_____

4, Thank you for invited me.　_____　_____→_____

5, If I am rich, I could buy that large house.　_____　_____→_____